

VI 水質環境

1. 調査方法

各地点、各深度ごとに、底層近くの水質について、①水温（℃）、②pH、③DO（mg/l）の3項目について、水質チェッカーU-10（堀場製作所）を使用し測定した。

なお、20地点においては、波打ち際が切り立った護岸で、水深が2mであったため1m水深の測定は行えなかった。

2. 結果および考察

本項目は、生息調査に付随するものとして実施したもので、分析項目も少ないため水質の状態について詳細に記することは困難である。しかも調査期間が約2ヶ月という長期にわたっており、日照や気温等の天候の変化に伴い、水質そのものも調査の初期と終期ではかなりの変動があったと推定され、各地域別の水質の状況を判別することは不可能である。そのため、ここでは若干の考察を加えるにとどめる。

①水温

全体的に浅部と深部の水温差は小さかったが、一部10.0℃以上も差のある地点があった。調査期間を通じての最高水温は、14地点の1m水深において32.2℃（8月24日）であり、最低は、45地点の5m水深の15.1℃であった。浅部と深部の水温差の最も著しかったのは23地点で11.1℃（8月28日）であった。

②pH

pHの範囲は、6.43～9.99である。各地点ともに浅部で高い値を示し、深部に移行するほど値が低くなる傾向が見られた。

③DO

最もDOが低かったのは、18地点の5m水深で19.97%である。また、最高は19地点1m水深の187.74%であった、ここはpHも9.99と高い値を示しており、水生植物の影響が大きいと考えられる。なお、調査地点の範囲においては、無酸素に近いような状態は見られなかった。

1969年度の琵琶湖沿岸帯調査との比較を行った。pH、DO共に前回調査よりも高い値を示していた。また、同一地点における水深別の測定値の差を比較してみるとpHでは、1969年度の1.2に対し今回調査では2.63、DOでは、1969年度の64.4%に対し今回調査では131.67%と水深間のpH、DOの差は広がっていた。このことは7m程の水深間でも環境の変化が大きくなったことを示すものと思われた。